

《資料紹介》 森政三コレクション 守礼門解体修理時の古写真

上江洲安亭¹

I. はじめに

森政三コレクションの地図・図面・古写真の紹介を過年度より継続して行っているが、今回は、1936年（昭和11）から翌年にかけて行われた保存修理時に撮影されたとみられる古写真について紹介する。

II. 戦前の守礼門修理

守礼門は、1933年（昭和8）1月23日に、首里城の歓会門・瑞泉門・白銀門、円覚寺の総門・左掖門・右掖門・放生橋・三門・仏殿・龍淵殿・鐘楼・獅子窟、崇元寺の第一門・左掖門・右掖門・本堂）、園比屋武御嶽石門とともに国宝指定された²。

守礼門は、国宝指定されたが、屋根は大破し、木造部分の腐朽等も甚だしく、国庫補助による解体修理が先述の通り1936～37年に行われた。工事自体は、所有者である首里市が行ったが、工事の指導監督は、文部省から派遣された森政三が行った。現場主任は仲座久雄、助手宮里俊光、棟梁知念朝栄等であったとされている³。

III. 森政三コレクションの守礼門解体修理時の古写真

森政三がコレクションしていた1936～37年の守礼門解体修理の現場を撮影した画像は全て紙焼き写真。画像の種類でいうと33種。同じ画像の紙焼き写真が数枚あるものもあった。同じ画像は割愛し、33種の内容を紹介する。

写真1は解体修理前の画像と思われる。守礼門の裏側から撮影されている。扁額が外され、上層屋根には覆いらしきものが掛けられ、軒に仮設の補強材が施されている。下層屋根には瓦が積み上げられている。表側には倒壊防止の添え柱が四本たてられている。

写真2～9は、柱や部材の加工作業の風景を撮影している。

¹ 一般財団法人 沖縄美ら島財団 首里城公園管理センター 首里城事業課 副参事（博士（芸術学））

² 園原謙「沖縄県の文化財保護史-昭和初期から琉球政府時代までの活動を中心に-」（沖縄県立博物館紀要第26号 p113～156 2000年3月）

³ 『首里城守礼門復原工事報告書』（琉球政府文化財保護委員会 守礼門復原期成会 1959年3月）

写真 2 は、守礼門の屋根から作業をしている大工、綾門大道でキャンパスに絵画を描いている男性を女学生と児童が見ている。工事区域の仮囲いは竹を使ったものを使用している。写真 3 は、のこぎりで柱の加工を行っている。写真 4・5 は鉾がけを行って柱を加工している。写真 6 は、柱のほぞを鑿で加工している。写真 8 は左側に鑿で木材を加工している大工、右側に加工した料枱が積まれている。また、写真 6 の画像の奥に写っている調書をとっているネクタイ姿の人物はおそらく森政三で、後ろのネクタイ姿の人物は仲座久雄ではないかと思われる。

写真 10・11 は解体中の上層屋根。写真 12 も解体中の上層屋根で竹と土で葺いていることが分かる。修理も解体した状況を把握したうえで同じように伝統技法で修理を行ったと思われる。写真 13・14・15 は、上層屋根の隅木。料枱を撮影している。修理前の現状写真と思われる。写真 16・17 は、頬かむりをして、着物にたすき掛けの女性が石臼と杵で漆喰餅を現場で製作している。写真 18 では、着物の女性が板に土のようなものを載せて運んでいる。おそらく屋根の葺土を運んでいるものと思われる。写真 20・21 は瓦の葺き替え作業。ここも着物の女性が藁で作ったと思われるガンシナー⁴の上に板を載せて、その上に瓦を何枚も載せて屋根の上まで運んでいる。建物の修理工事は、男性の仕事のように思われるが、このように戦前には瓦葺作業に恒常的に女性の役割もあったことが伺える。写真 19 は挟石の画像で、埋める前の本来であれば地中部分のところまで撮影している。挟石には「は北」と記されており、おそらく北側柱の挟石だと思われる。

写真 22・23 は降棟の飾瓦で、オリジナルの古瓦ではないかと思われる。宝珠形で尾の長い巴紋を描いている。写真 24・25 も降棟の飾瓦の側面画像と思われる。写真 22・23 の側面画像かは検討を要するが、瓦当紋がある先端部分と思われる画像左の上部が突き出しているので宝珠形である。降棟の飾瓦は上層屋根四枚、下層屋根四枚あり、写真は 2 種類である。また、宝珠形で瓦当紋が巴紋の飾瓦の下に桃を描いた飾瓦があるが、森政三コレクションには写真が残されていない。

写真 26・27 は巴紋の形状がかなり崩れた軒瓦となっている。写真 26 は左側に突起物があり、宝珠形のようにみえるがほぼ丸瓦である。写真 27 は丸瓦である。古瓦ではないと思われる。使用できなくなった飾瓦の代替として製作した試作品であろうか。用途は検討を要する。

写真 28 は修理後の下層降棟の宝珠形巴紋の飾瓦である。写真から写真 22・23 とは別のものと思われ、なおかつ古瓦の再利用ではないかと思われる。

写真 29 は修理後の下層隅棟の軒丸瓦である。

写真 30・31・32 は足場が掛かっているが屋根が外されている画像となっている。瓦の漆喰から葺き替え直後と思われるので、ほぼ完成した時期の写真ではないかとおも

⁴ ガンシナーは、藁をドーナツ状に編んだ民具。頭上に載せて板・瓦等の重量物を運ぶための保護材として使用したものと思われる。

われる。写真 31 には背広姿の男性が 3 人。写真 32 には背広姿の男性が 4 人。工事技術者らしき男性が 4 人写っている。写真 31 を拡大すると帽子を被った背広姿の男性は森政三で、隣の人物は仲座久雄である。3 人目のノーネクタイの人物は不明。おそらくは工事終了まじかに記念撮影を行ったものではないかだろうか。

写真 33 は上層屋根・下層屋根とも白っぽく写っており、経年劣化して黒変しているようにみえないことから葺き替えたばかりで解体修理をほぼ終え、足場が外された状態の守礼門となっている。おそらく 1937 年頃の守礼門と思われる。ただし足場が外されているが扁額はまだ掲げられていないことが分かる。

守礼門は周知の通り、沖縄戦で破壊されてしまうが、1956 年（昭和 31）に守礼門復原期成会が発足し、市民の浄財、琉米親善委員会の寄附金、琉球政府及び那覇市の助成を得て 1957 年に工事を着手した。この時の復原指導監督も森政三。工事監督に仲座久雄、大工棟梁に知念朝栄と、戦前の解体修理に携わったメンバーが参画し（復原工事報告書 1959）、その戦前の解体修理の知見を活かした復原工事が行われたといえる。

本稿では、戦前、1936 年の守礼門修理時の作業状況を撮影した古写真を紹介した。おそらく、各工程・部位でもっと撮影した写真はあったと思われるが、当財団所蔵の森政三コレクションにおいては、この 33 種となっている。それでも昭和初期の沖縄の文化財建造物の保存修理途中の状況をおさめた貴重な画像が残されているといえる。解体した上層屋根の状況や料椽、飾瓦の現状を記録撮影して工事に臨んでいることや、工事作業の状況にしても、柱の製作では伝統的な鉾がけで成形していることが分かり、漆喰餅は現場で製作して使用していることや、瓦葺に女性が多く作業に加わっていることがみてとれる点は貴重である。

本稿では、森政三コレクションの公開を目的として紹介しているため、本稿を参照して、琉球・沖縄の古建築の様相や、戦前の文化財修理の状況等に関する調査研究の一助になれば幸いと考えるものである。



写真 1

解体修理前の守礼門。1936 年（昭和 11）頃。



写真 2

修理中の守礼門屋根からの風景。



写真 3

柱の加工を行っている。



写真4
柱の鉋がけを行っている。



写真5
柱の鉋がけを行っている。

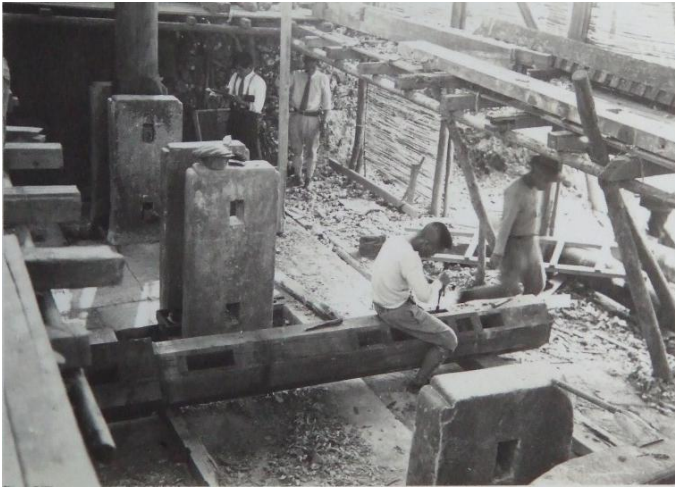


写真6
柱のほぞを加工している。



写真7
部材等の加工風景。



写真8
柱・料栱等の部材の加工風景。



写真9
部材等の加工風景。



写真 10
解体中の上層屋根。



写真 11
解体中の上層屋根。



写真 12
解体修理中の上層屋根。竹と土で葺いている。

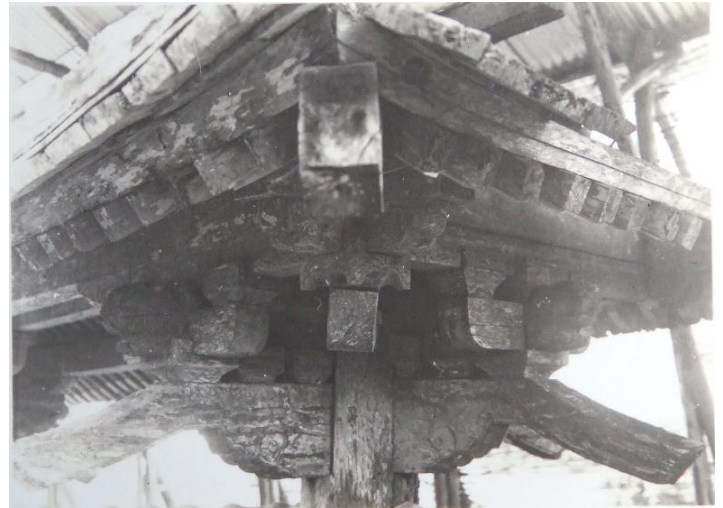


写真 13
上層屋根の隅木。

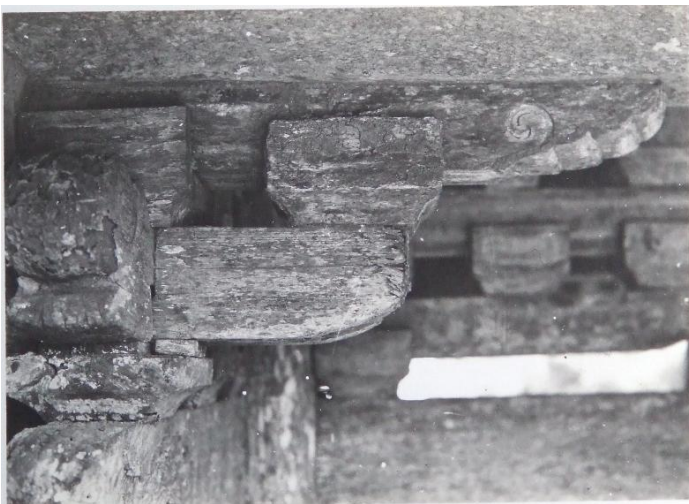


写真 14
料栱。

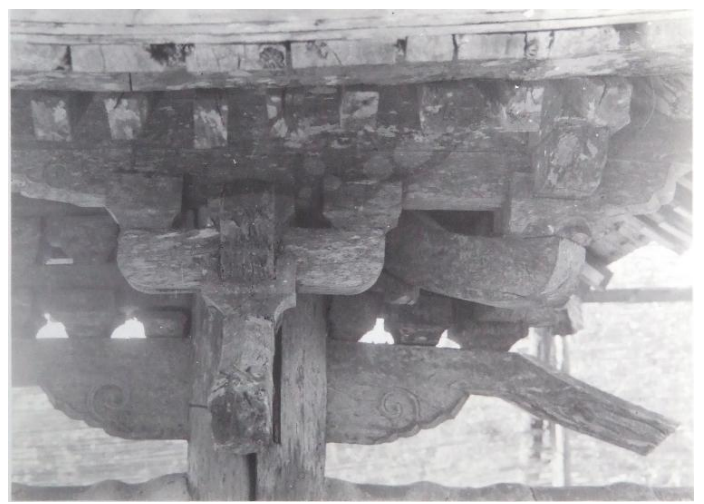


写真 15
料栱。



写真 16

女性が石臼と杵で漆喰餅を作っている。



写真 17

女性が石臼と杵で漆喰餅を作っている。



写真 18

女性が屋根内部の葺土を運んでいる。



写真 19

守礼門柱の挟石。



写真 20

瓦の葺き替え。女性が瓦を運んでいる。



写真 21

瓦の葺き替え。女性が瓦を運んでいる。

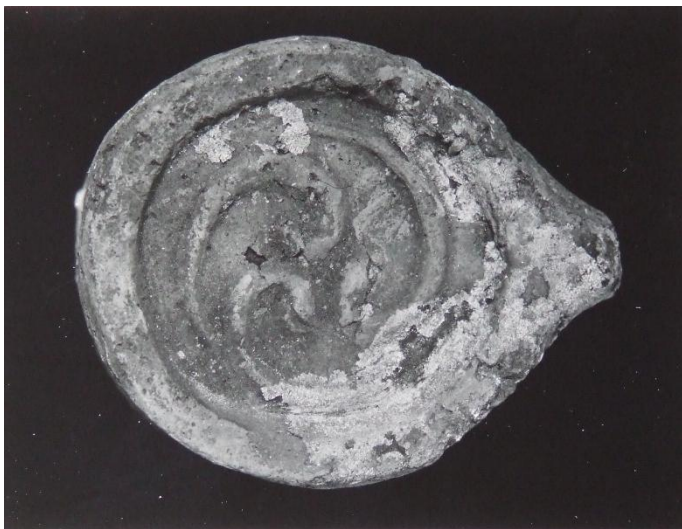


写真 22

降棟の飾瓦。オリジナルの古瓦か。

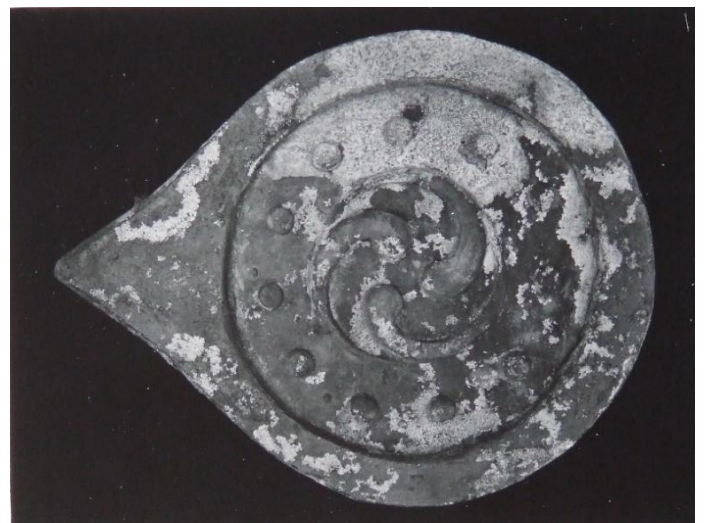


写真 23

降棟の飾瓦。オリジナルの古瓦か。



写真 24

降棟の飾瓦側面の画像か。



写真 25

降棟の飾瓦側面の画像か。



写真 26

降棟の飾瓦。試作途中の画像か。



写真 27

降棟の飾瓦。試作途中の画像か。



写真 28

修理後の下層降棟の飾瓦。



写真 29

修理後の下層隅棟の軒丸瓦。



写真 30

足場。素屋根が外され、ほぼ完成時と思われる。



写真 31

足場に森政三・仲座久雄等工事関係者。

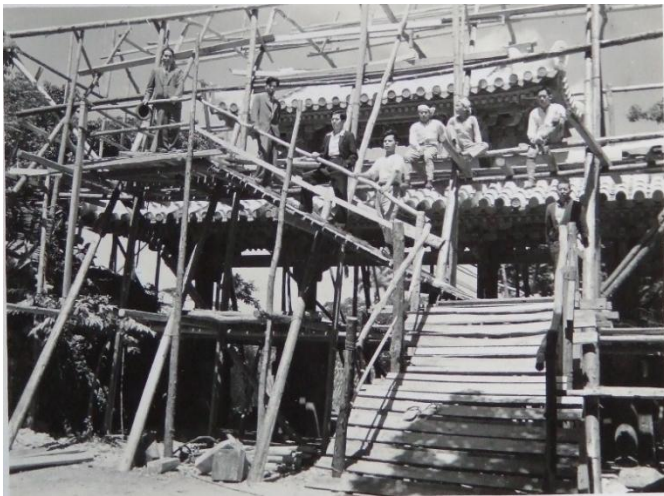


写真 32

足場に職人も含めた工事関係者。



写真 33

解体修理を終えた守礼門（1937年（昭和12）頃）。



写真 6 の拡大画像

左側のメモを取っている人物は森政三か。

右側の人物は仲座久雄と思われる。



写真 31 の拡大画像

左上の帽子を被っている人物が森政三。中央は仲座久雄。